

Title	ホワイトヘッド哲学における生成と主体
Author(s)	森, 元斎
Citation	年報人間科学. 31 P. 1-P. 14
Issue Date	2010
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4623">https://doi.org/10.18910/4623</a>
DOI	10.18910/4623
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

---

〈論文〉

ホワイトヘッド哲学における生成と主体

森  
一元齋

---

〈要旨〉

本稿ではホワイトヘッド哲学における生成と主体について扱う。彼の哲学にとって生成は中期から後期にかけて一貫した主題である。中期では、生成を語るさいに「出来事」をなによりもまず出発点にしている。その「出来事」を捉えるものが、ある種の主体であるわれわれの「感覚・覚知」である。しかしながら、「出来事」やそれを規定する「対象」をも含めて「感覚・覚知」を考え始めるや否や、その生成は曖昧になり始める。中期においては「出来事」を「対象」が規定する「進入」という概念が生成と関わりをもつか否かもまた曖昧である。それに対して彼の後期における生成概念を主体と相関的に考察することで、中期における仕方のようにその生成は曖昧なものではなくなり、生成について明瞭に語る事ができるようになる。後期哲学における主体は、中期のそれとは異なり、生成しつつある当の「出来事」にその地位を付与されるようになる。また「出来事」を「対象」が規定する「進入」は、後期哲学において、まさに生成そのものとなる。かくして、後期哲学において生成を明瞭に語れ、なおかつ体系的な仕方論じることができるようになるのだ。中期哲学における問題点をあぶり出し、それを解消してい

く後期哲学において、ホワイトヘッドの生成の哲学がより明瞭になることをここでは明らかにする。

キーワード

ホワイトヘッド、生成、主体、出来事、対象、進入

(0) はじめに

ホワイトヘッドの中期哲学において、自然における「出来事」(event)の生成を捉えるものとして「感覚・覚知」(sense-awareness)が取り上げられるにもかかわらず、その内実について取り扱われることはほとんどない。しかしながら、後期哲学において、自然(あるいは宇宙や世界)における「出来事」(現実的存在 (actual entity) や「現実的生起」(actual occasion) の生成を捉えるものとしての主体は原理として認められている。いずれの時期においても生成が中心的な主題となっているのであるが、そのなかで主体は大きく関わっている。そこで本稿では、なぜホワイトヘッドは後期になってから主体を原理として認めるようになったのか、という問題を生成と関わりながら論じることで、ある一定の解答を獲得することを目指す。

本稿では、全体として生成と主体を相関的に考察し、まず始めに中期哲学の著作である『自然認識の諸原理』『自然という概念』での自然における「出来事」の生成と、それを捉える「感覚・覚知」を取り上げる。そして「出来事」の生成のさいに重要となるであろう「進入」(ingression)という概念について論じる(1)(2)。次いで後期哲学の著作である『過程と実在』での自然(宇宙・世界)における「出来事」(現実的存在)・「現実的生起」の生成と主体を考察することで、ホワイトヘッド哲学の生成概念を十分に論じるためには、後期における仕方であれば生成を明瞭に語ることはできない、という解答を導き出す(3)(4)。

(1) 『自然認識の諸原理』における出来事と生成

中期ホワイトヘッド哲学において、彼は自然を主題として扱う。そのなかでもとりわけ次のような側面を扱っている。

自然には、いわば互いに相容れず、しかも互いに本質的な二つの側面が存在している。一方の側面は、創造的前進 (creative advance) における発展、つまり自然の本質的生成性 (becomingness) である。他方の側面は、事物の永続性 (permanence)、つまり自然が再認識されうるという事実である。かくして、自然は常に新しくも古くもない諸々の対象 (object) と関係している新しさなのである。(TKK, p.98)

この文言が意味しているのは、自然の二つの側面、つまり自然が新しさに向かって創造的に前進し生成すること、そして、その新たに生成している自然に関わる永続的な諸々の「対象」が存在していること、である。この二つの側面は共に、彼の中期哲学だけではなく、後期哲学においても一貫して論じられている主題である。ホワイトヘッドにとつて、前者、つまり自然が前進し生成することは、その都度捉えられ認識される具体的な「出来事」が常に前進し生成する側面であり、後者、つまり自然が再認識されうるということは、具体的に捉えられる出来事から、抽象的に科学的な「対象」として再認識される側面である。そしてこれらの具体的な「出来事」と抽象的な「対象」とが互いに関わるという自然

観を、ホワイトヘッドは本質的であると提示している。

中期のホワイトヘッドは、具体的な「出来事」を捉えることから出発して、それを抽象化することで永続性を再認する方法、つまり物理学や数学や概念といった諸々の「対象」を獲得する方法について述べている。例えば、それをホワイトヘッドは、「延長的抽象化の方法」(the method of extensive abstraction)と名づけて自らの体系のなかで考察している。また多くの注釈者がそれに検討を加えている。<sup>(2)</sup>しかしながら、前者の自然の新しいさに向かう創造的前進については、ここで自然の本質的な二つの側面のうちの一方の側面と明言しているにもかかわらず、彼の中期哲学のなかではあまり語られていない。そこで本稿では、まず中期哲学のなかでのこの前者の側面について見ていくことにしよう。

ホワイトヘッドにとつて、自然の認識の出発点は「出来事」であり、それを捉えるものは「感覚・覚知」である。まずは、彼の哲学のステップを踏んで一九一九年に刊行された『自然認識の諸原理』から見ていくことにする。

われわれの知る自然は、直接的に現存する連続的な流れであり、それは、われわれの知覚的な覚知 (awareness) によって多様な質をもったばらばらの出来事へと部分的に分解される。すなわち、われわれがその部分の質を識別しなくても、それが現に存在するのを感じさせるような不定の「超えたもの」(beyond) が常に存在するのである。(PNK, p.69)

われわれが知ることのできる自然は、直に現存しているものである。それが「出来事」であり、その「出来事」を覚知<sup>(3)</sup>によって、さまざまな「出来事」へと弁別することができるという。例えば今私が目にしてるのは、諸々の白と黒のものがあることである。そこで、白い壁紙、白いモニター、黒いキーボード、黒いスピーカーといったように、覚知の所産によって分解され、識別が可能になっていく。こうした諸々の部分的な「出来事」は、常に他のものを超えて存在している。というのも、モニターもキーボードも、私の家のなかに含まれているからだ。この家も三軒続きの町屋という建物のなかに含まれている。この建物は……といったように、際限なく、つまり不定の超えたものが存在するのである。そうした超えたものはわれわれが今モニターとキーボードを主に知覚しているの直接見ることはできないものの、それを考えることはできる。「識別的覚知を超えたもの」のこうした認識は外在性 (externality) に関する科学理論の基礎である (PNK, p.69)。外在性を理解するためには、直に現存しているものだけではなく、そこから派生した、当の「出来事」を超えたものをも認識しなければならないだろう。そのためにホワイトヘッドは主として三つの外在性の条件を定めている (PNK, p.71 以下参照)。それは (i) 当の「出来事」と、(ii) 延長関係、そして (iii) 絶対的位置である。(i) はすでにみたように、「出来事」をなによりもまず捉え、そして弁別していくことである。(ii) は先に少し言及した含み/含まれる延長関係である。このことについては後述する。(iii) は覚知するものが、絶対的に静止していることである。議論の都合上、まずは (iii) の絶対的位置からみてみよう。(iii) の絶対的位置は、覚知

するものが絶対的に静止していることであると述べた。どういふことか。流れとしてわれわれに捉えられた自然は、諸々の「出来事」へと覚知によつて弁別されると先の引用でホワイトヘッドは述べていた。そしてそこから永続性を抽象化し再認するのであるから、覚知するものが当の「出来事」と連合することで、まずは固定されなければならない。そのように固定されることが絶対的位置なのである。このように絶対的位置として「出来事」と覚知するものが固定されることで、「出来事」をさまざまに弁別可能にし、永続的な「対象」を抽象化することが可能になるのである。

次いで(ii)の延長関係についてより詳細にみてみよう。彼はそれについて次のように述べている。

出来事xは出来事yを「超えて延長している」かもしれない。言い換えれば、yはxの部分であるかもしれない。主として時間空間の概念は、完全ではないにせよ、この延長関係の経験的に決定された特性から生じる。(PNK, p.73)

ある「出来事」が他の「出来事」を超えて延長しているというのは先に述べたように、この家はモニターやキーボードを含み、逆に述べればモニターやキーボードはこの家に含まれている。ここで含む／含まれるということが、延長関係である。つまり部分的な「出来事」であるモニターは、それを含んでいるところのこの家を超えて延長されており、家はモニターを超えて延長しているのだ。ここまでは先に論じてきた。

そしてさらに、このような「出来事」の延長関係から、時空の概念が生じるという。これもまた延長関係である。どういふことか。「車の出来事は街路の全生活の部分であり、車輪の通行もまたその車の通行という出来事の部分である」(PNK, p.75)。車は街路という全体的な「出来事」の部分である、という空間的なことだけでなく、車が走り、その通行という(動くという)時間的なことにさえも、ホワイトヘッドは延長関係を指定している。つまり、「出来事」は時空的な延長関係であるのだ。「出来事」には常に空間的な側面だけではなく時間的な側面が存在していることになる。例えば、このモニターも、私が何かをキーボードでタイプするたびに、空間的に文字が増えたり消えたりしていく。そしてその文字は時間をともなつて削除されたり増えたりしていく。文字列の空間的配列は時間の変化をともなっているのだ。あるいは、このモニターも一個の固い存続物に見えるものの、分子レベルで見れば、常に様々な分子が行き来している。時間の経過をともなつて分子が行き来することによつて、存続的にみえるこのモニターも空間的体積の増減があり、これもまた時空的な「出来事」である。こうした推論をホワイトヘッドは延長関係と述べている。

この延長関係に基づいて、「時間や空間といったさまざまな要素が」長期的抽象化の方法」を繰り返して適応することによつて形成される」(PNK, p.76)。先にも述べたように、具体的な「出来事」からこの延長関係を導出し、さらにそこから、部分的な「出来事」を規定している持続によつて時間が、そして抽象的集合によつて空間が、抽象化され導出されていく。<sup>(4)</sup>具体的な自然である「出来事」から、抽象的な時間や空間や概念を

導出することで、われわれの具体的な自然には、抽象的な諸々の「対象」が関わっていることを知らせてくれるだろう。しかしながら、時間や空間や概念は、具体物から派生的に知ることのできる抽象の対象であり、具体的な自然そのものではない。抽象の対象を導出するだけでは、具体的な自然が創造的に前進している、つまり生成している側面を記述していることにはならない。もちろん、抽象化された諸々の「対象」を再認することで新しい（とされる）「出来事」は、以前の「出来事」（とその「対象」と比べられることで、新しい「出来事」である、と理解されるかもしれない。そのように考えれば、新たな「出来事」が事後構成的に生成したということは確認できるだろう。しかしながら、こうした見解では「出来事」の事後構成的に生成したことは語れても、当の「出来事」の生成そのもの、つまり「出来事」の生成しつつあることは語る事ができないように思われる。

ここで、「出来事」から「対象」への図式ではなく、「出来事」そのものの生成についてさらに検討してみよう。ここから一九二〇年に刊行された『自然という概念』へと移る。なぜなら、『自然認識の諸原理』は、主に先に述べた延長的抽象化の方法や、時空の物理学的な定式化について考察された書物であり、生成については、冒頭に引用した文言でしか語っていないからだ。

## (2) 『自然という概念』における「進入」と「感覚・覚知」

とはいえ、『自然という概念』におけるホワイトヘッドもまた、「出来

事」の生成について、決定的な文言を残しているわけではない。ここで、そもそもなぜ、具体的な「出来事」から抽象的な「対象」が導出できるのかを考えてみる。そうすると、「対象」がそもそも「出来事」に内在しているがゆえに、それを導出できるのではなからうかと考えることが可能になるだろう。こうした観点に立つようになったのが『自然という概念』からであり、そのなかで初めて「出来事」から「対象」への抽象化の側面だけではなく、抽象から具体への側面について考察されている。『自然という概念』になるとホワイトヘッドにとって、抽象的な時間や空間や概念などの「対象」はそもそも「ある出来事」の構成要素である。実際、出来事の本質とは、それを構成する要素である対象にほかならず、また対象を出来事の中へ進入させる仕方なのだ（GN, p.142-144）。『自然認識の諸原理』とは異なり『自然という概念』では「進入」という考えが導入されている。

「対象」は「出来事」に内在しており、延長関係の含み／含まれ関係とは異なる。そしてその「対象」が「出来事」を性格づけているという。どういうことか。「出来事」は直接的に捉えられ生成している何かであるが、それを規定している本質的な性格は、「対象」の「永続性」（GN, p.144）である。例えば、私が今具体的に捉え認識している「出来事」としてのモニターに内在している抽象的な「モニター」という「対象」は、あなたの「出来事」としてのモニターに内在している抽象的な「モニター」であっても良い。つまり、抽象的な「モニター」という「対象」そのものは、AさんのモニターであれBさんのモニターであれ、「モニター」である。それは永続的な「対象」であるのだ。それに対し、先

にも述べたように、具体的な私の「出来事」としてのモニターは、分子レベルなりさまざまな水準で時空的に移行している。つまり、「出来事」モニターには具体的移行として生成し前進していく側面と、抽象的な「対象」としての永続的な側面があるだろう。「モニター」という対象は、「再現する」自然の要素なのだ（CN, p.144）。つまり、「モニター」という対象は、どんな所有者でもいつでもどこでもそれはモニターなのである。こうした「対象」が「出来事」に内在している仕方をホワイトヘッドは「進入」と呼んでいる。つまり、具体的な「出来事」から抽象的な「対象」への方法が延長的抽象化であるならば、その逆である抽象的な「対象」が具体的な「出来事」に入り込んでいることを「進入」と呼んでいるのである。この考えは『自然という概念』になって初めて導入されている。それでは、「進入」についてみてみよう。

対象の出来事への進入は、出来事の性格が、自らをその対象の存在によって形成する、という仕方である。つまり、出来事が何であるかということは、対象が何であるかということである。そして……この両者間の関係を「対象の出来事のなかへの進入」と呼ぶ（CN, p.144）。

「対象」が「出来事」に「進入」することによって、「出来事」は形成されていくという。例えるならば、「出来事」は、何もそれを規定するものがなければ、カントの物自体のようなものかもしれない。「出来事」は「対象」が「進入」することによって「出来事」になる。つまりここで「出

来事」が生成していると言えるかも知れない。何もなかでしかない「出来事」を規定するところの「対象」がなければ、「出来事」は「出来事」として可能にならない。

ホワイトヘッドによれば、「出来事」の延長関係ですら、われわれの推論の所産であるのだから、「出来事」を捉えた刹那には、われわれは、ただの連続的な世界しか認識していないだろう。そしてこうしたそれだけでは何もでもない「出来事」に「対象」が「進入」することによって、「出来事」の性格が形成される。「対象が何であるか」ということは、出来事が何であるかということも等しく正しい。自然というのは、出来事のなかへの対象の進入がなければ、いかなる出来事もまたいかなる対象も存在しない（CN, p.144）。このように、前進し生成する流動的な「出来事」を永遠的な「対象」が規定するからこそ、「出来事」が何であるのかを理解されそれが明瞭に生じるように思われる。後期では明確に述べているのであるが、このことがまさに生成なのではないだろうか。

ところで、こうした「出来事」であれ、「対象」であれ、それを認識可能にしているものは何であるだろうか。冒頭に「出来事」を捉えるものは「感覚・覚知」であると述べた。『自然認識の諸原理』では、「出来事」を捉えるものは、先の引用で登場した知覚的な覚知や、単に覚知、あるいは観測者などとさまざまに呼ばれていた。『自然という概念』になると、「出来事」を捉えるものは、「感覚・覚知」と呼ばれ、言葉は少ないもののホワイトヘッドはそれを語る。ホワイトヘッドはその「感覚・覚知」について次のように述べている。

かくして、感覚・覚知にとつての窮極的事実とは一つの出来事である。この全体的な出来事をわれわれは部分的な出来事へと弁別していく。われわれは、自分たちの身体的生である出来事、この部屋の内部での自然の流れである出来事、さらにはぼんやりと知覚された一連の他の部分的な一連の出来事を覚知しているのである。このことがまさに、事実をその部分へと感覚・覚知において弁別することなのだ。(CN, p.14)

ホワイトヘッドにとつて何よりもまず前進し生成する「出来事」があることで「感覚・覚知」がそれを捉える。「何の変化もない自然は捉えることも見ることもできない」(CN, p.14n)。「感覚・覚知」は、「出来事」をその部分へと弁別することができ、先にも述べたような延長関係や延長的抽象化といった推論が可能になる。このように認識するものを彼は「感覚・覚知」と呼んでいるのだ。これについての議論は『自然の概念』になつて明白に導入されている。そしてこの「感覚・覚知」は、もちろんわれわれに備わっているものであり、これが「出来事」を捉える。「感覚・覚知」があるからこそ、延長的抽象化を可能にし、それによつて「出来事」に「進入」していた「対象」が理解される。しかしながら、生成する「出来事」を捉えそれを弁別し始めるや否や、絶対的位置が固定され、そこから諸々の永続的な「対象」が導出される。それゆえ、「出来事」の流動的な生成は、固定されてしまい、当の生成しつつあることではなく、生成したことを認識することになる。つまり、「感覚・覚知」が当の「出来事」とその「対象」を再認するのは事後構成的なことなの

である。

前進しつつある、つまり生成しつつある「出来事」そのものはいかにして捉えられるのであろうか。冒頭にも述べたように、ホワイトヘッドにとつて、生成は自然にとつて本質的な一つの側面であり、それを記述することがホワイトヘッドにとつて課題であつたのではないだろうか。

確かに、「感覚・覚知」によつて「出来事」を捉えることで、「出来事」の生成したことは理解できるだろう。なぜなら、新たに捉えられた「出来事」に内在している「対象」を事後構成的に延長的抽象化によつて導出することはできるからだ。しかしながら、「対象」が「出来事」から導出可能であるということは、そもそも「対象」が「出来事」に内在していなければならないし、そもそもその対象が出来事に進入していることが生成しつつあることなのではないだろうか。「感覚・覚知」が捉えた「出来事」は、そもそも弁別されながらも生成しつつあるだろう。しかしながら、そこから永続性へと抽象化するということは、「出来事」の流れをとどめてしまい、結局は、今現に生成しつつある「出来事」の認識を放棄してしまうことにならないだろうか。

整理しながら考えてみよう。「出来事」は「感覚・覚知」によつて捉えられる。その「出来事」には抽象的な「対象」が内在している。その「対象」は抽象的なものであり、「出来事」を形成する性格であつた。「出来事」は「対象」に「進入」されることで生成しているように思われるのであるが、そうした有様を「感覚・覚知」は事後構成的にしか捉えることができないのである。またこうしたわれわれの「感覚・覚知」は、生成し動いている自然に対して、静止しているのである。しかしながら、「出



来事」とともに、覚知するわれわれも身体的な「来事」であるのだから、覚知するわれわれも生成しつつあるのではないだろうか。しかしながら、中期のホワイトヘッドは、こうした問いには答えてくれない。覚知するのは絶対的位置を有しているのである。

生成が本質的な自然の側面であるにも関わらず、身体的「来事」を考えるや否や、それを覚知するものとそれに付随している身体は、一方は絶対的に固定され、一方は前進し生成する。つまり認識するものとされるもので、いわば静止／運動の図式ができるといえよう。物理学的な観測基準系を考えれば当然かもしれないが、それでは認識するものの生成はどのようにして捉えられるのであろうか。

中期のホワイトヘッドはもちろん、主題として「われわれは注意を自然そのものに限り、感覚・覚知に開示された存在を超えて先へ進まないことにする」(CN, p.28)と述べている。またホワイトヘッドはこのようにも述べている。

われわれは認識するものと認識されるものの総合を形而上学にまかせよう。しかし、もし本書『自然という概念』の発展の方向を理解しようとするならば、この点について、より一層掘り下げた説明と弁護が必要になる。(CN, p.28)

中期ホワイトヘッド哲学は、自然という外的所与のみを研究的のとしていたので、おそらく主体の生成について考察するべきではなかったのだ、と考えていたように思われる。なぜなら、どこかで固定した位置を

担保しなければ、科学で扱われるような確実性を見出しえないであろうからだ。当のホワイトヘッドは自らのこの時期の哲学を「自然哲学」(N, p.30)と呼んでいる。自然哲学はイギリスにおいて、ニュートン以来、物理学をはじめとする自然についての哲学であった。事実彼は『自然という概念』の二年後に、アインシュタインとは異なる重力理論を定式化する。しかしながら、ホワイトヘッドのこの時期の哲学的態度では、生成について明瞭に語ることはなく、なおかつ生成を捉えている主体の生成についても述べることがない。彼の自然観の本質的な側面である生成を十分な仕方では語ることがないのである。

この哲学的態度のおよそ十年を経た後に、彼は形而上学を展開する。それが後期の主体を原理的に認める哲学的態度である。また彼は中期の『自然認識の諸原理』の第二版が一九二四年に刊行されたさいに、「私は近い将来、……[中期の]見地を完全な形而上学的研究に包括することを望んでいる」(PNK, preface to second edition)と述べている。次節では、生成を十分な仕方では語ることが可能にするために、また主体の生成が述べられていることを確認するために、彼の哲学の大成ともいえる後期形而上学をみてみよう。そして、このことをみることで、なぜホワイトヘッドが主体を明確に認めるようになったのか、つまり生成を語ることが可能になる条件としてなぜ主体が語られるのか、がより明瞭に理解されるようになるだろう。

### (3) 『過程と実在』における生成と主体

後期ホワイトヘッド哲学も中期のそれと同様に、生成が主題である。ホワイトヘッドは『過程と実在』のカテゴリーのなかで、次のように述べている。

現実世界は過程であり、この過程は現実的諸存在の生成であるという。このような現実的諸存在は被造物であり、「現実的生起」とも呼ばれる。(PR, p.22)

中期と同様に、この世界は諸々の現実的な存在は生成であるとしてカテゴリーのなかに記述されている。ここで、注意しなければならないのは、「現実的存在」(と「現実的生起」という術語である。これは通常物質的な意味での存在のみを表現しているのではない。このカテゴリーの別のところでも述べているように、「現実的存在——現実的生起とも呼ばれる——は、世界がそれから構成されている究極的な実在的事柄である」(PR, p.18)。つまり、私の「出来事」であれ、いまだこかで起こっている他の「出来事」であれ、モニターであれ、精神であれ物質であれ、何であれ「現実的存在」なのである。例えば、ホワイトヘッドが例として挙げた「現実的存在」(現実的生起、出来事)をワラックは次のように列挙している。

神、瑣末な一吹き existence、一羽の鳥、一匹の野獸、一本の木、一本

の草、一枚の葉、一羽の鳥、一頭の羊、一粒の砂、母親についての子どもの観念、太陽、ソクラテス、……人間の経験、下級の有機体、いわゆる「空虚な空間」における生起、存続する生きていない生起、原子的有機体、動物の生起、植物の生起、細胞の生起、大規模な無機的な生起、分子以下の出来事。(Wallack, 1980, p.28-29)

なんであれ、「現実的存在」であることが理解されるだろう。とにかく、無機物であれ、有機物であれ、それ以外であれ、ホワイトヘッドにとつてすべてが「現実的存在」であるのだ。またこの「現実的存在」は「出来事」とほぼ同義である。<sup>(2)</sup>

ホワイトヘッドは「生成」は新しさへの創造的前進である」(PR, p.28)ともカテゴリーで述べている。「現実的存在」はその都度の新たな世界の構成要素である。中期でも本質的側面の一つとして新しさや生成が記述されていたのであるが、後期においても生成がカテゴリーのなかで記述されているがゆえに、彼の一贯した主張であることが理解される。また、「対象」と同様の術語もカテゴリーのなかで論じられている。それを後期のホワイトヘッドは「永遠の対象」(eternal object)と名づけている。さらに、中期で「進入」が語られていたのと同様に、次のように述べている。

ある永遠の対象は、現実的存在の生成へと「進入」するためのその潜在性 (potentiality) によつてのみ、記述されるということ。……それは純粹に潜在的なものである。「進入」という用語はある永遠

の対象の潜在性が、特殊な現実的存在の規定性に寄与しながら、そこに現実化される特殊な仕方、関連している (PR, p.23)

「出来事」・「対象」が「現実的存在(生起)」・「永遠的对象」として術語が取って代わったものの、ここで論じる限りでのそれらの術語の変化に対する注釈は必要ない。<sup>(6)</sup>しかしながら、「永遠的对象」が「現実的存在」に「進入」することが、はっきりと生成であると明言されている。中期では生成は一体いつ起こっているのかは明白ではなかった。それに対して、後期では「進入」こそが生成であるとされている。

ところで、後期形而上学において、主体は原理として語られていると前述した。それはどのような仕方でも語られているのであろうか。後期の主体についてみてみよう。ホワイトヘッドによれば、主体主義的原理は次の三つの前提からなるという (PR, p.157-158)。(i)「実体・属性」概念を、究極的な存在論的原理を言い表すものとして受け入れること。(ii)常に主語であって決して述語にはならないものとしてのアリストテレス的第一実体の定義を受け入れること。(iii)経験主体は第一実体だとする仮説。(i)の実体・属性概念は、常に性質が実体に内属して表現されるということである。(ii)のアリストテレスの実体は、二つの排他的クラスを分け持っているということである。つまり、アリストテレス的に述べるなら普遍と特殊であるのだが、ホワイトヘッドは普遍と特殊という区別を採用せず、「永遠的对象」と「現実的存在」とをそこに当てはめている。そして、(iii)から主体は「現実的存在」であるということが理解される。ここで、中期哲学との違いが現れてきている。

ホワイトヘッドは、中期では主体的なものを「感覚・覚知」あるいは覚知するものとして取り上げていたのに対し、後期では主体を原理としてはっきりと認めている。またホワイトヘッドは、中期では主体的なものは絶対的に固定されていたと考えていたのに対して、後期では主体が「現実的存在」であるのだから、それ自身生成するものであると記述していることになる。

もちろん、主体である「現実的存在」にも「永遠的对象」は潜在性として「進入」する。そして、「出来事」から「現実的存在」に取って代わり、その「現実的存在」そのものが、主体であるという。そうしたいわば主体の出来事が現実的な存在であり生起であるのだ。「私」という視点が、「出来事」に織り込まれ、なおかつ「(永遠的)対象」が「進入」している、という立場に変貌している。中期では「対象」が「出来事」へ「進入」し、そしてそれによって生じた(であろう)「出来事」から「対象」を抽象化することによって、新たな「出来事」が認識されるのではないかとわれわれは検討してきた。しかしながら、後期では「永遠的对象」が「進入」することで「現実的存在」が生成しつつあるのはもちろんのこと、それに加え主体的出来事である「現実的存在」は一つの主体であるというのだ。その「現実的存在」が世界の生成しつつある構成要素であるならば、「私」が世界の生成の一翼を担っているともいえるだろう。中期哲学では、「出来事」が生成しつつあることや、「感覚・覚知」や覚知するものの生成について明確には語られていなかった。それに対して、主体を原理として認める後期哲学では、主体としての「出来事」が丸ごと生成しつつある、ということになる。そしてその性格は当の「現実的

存在」を規定している「永遠的对象」について検討を行うことで、生成そのものを記述することができるようになる。いわば、「出来事／対象／感覚・覚知」のトリアーデから、「現実的存在／永遠的对象」という構図に変貌しているのである。

このような哲学的立場をホワイトヘッドは自ら「有機体の哲学」と名づけながら、次のように述べている。

有機体の哲学はカント哲学の逆転である。『純粹理性批判』は、主観的所与が客観的世界の現象へと移行する過程を記述する。有機体の哲学が記述しようとしているのは、いかにして对象的所与が主体的充足 (subjective satisfaction) へと移行し、そしていかにして对象的所与における秩序が主体的充足における内包 (intensity) を与えるのか、ということである。カントにとっては、世界は主観から発生する、有機体の哲学にとっては、主体というよりも、「自己超越体」(superject) が、世界から発生する。(PR, p.88)

中期でも後期でも一貫してホワイトヘッドの哲学は生成を主題としている。とりわけ後期でその生成は、抽象的で潜在的な「対象」が「現実的存在」に「進入」していくことである。「現実的存在 (生起)」には主体が織り込まれており、いわばその主体的出来事へといかにして潜在的対象から生成するかが彼の立場であることが理解される。つまり現実化あるいは主体化ということを充足しようとする点に彼の哲学の重要な態度が見て取れるのだ。ホワイトヘッドは、カント哲学は主観の経験から

客観性を導き出そうとする哲学である、と理解している<sup>(7)</sup>。それに対して、ホワイトヘッドの生成を論じる有機体の哲学は、「対象」から主体への、つまり超越から現実への生成についての哲学であると彼は述べている。それゆえ、具体的な主体的出来事 (「現実的存在・生起」) のなかに超越的なもの (「永遠的对象」) が「進入」しているという意味で、彼は「自己超越体」という耳慣れない言葉を編み出している。この自己超越体は潜在的で超越的な「対象」が現実的な存在や生起に「進入」していくという特徴を表しているように思われる。というのも、主体的出来事は主体ではあれどもそれは「対象」から成り立っているからだ。そしてその自己超越体こそが、彼の哲学にとつての出発点であるという。

中期のホワイトヘッドの立場では、「対象」が「出来事」へ「進入」することや、「出来事」が「感覚・覚知」にその都度認識されることで、その都度新しく生成したであろうことが述べられていたのであるが、後期のホワイトヘッドの立場になると生成しつづけることがより明瞭に語られるようになる。「永遠的对象」が主体的出来事を規定しつづけて主体化し現実化すること、それが生成であるというのだ。後期における「進入」は、それ自身現実化の作用であり、主体が有しているものである。そうした現実的な主体が「対象」を有していること、つまり主体が客体を有していること、こうしたことが自己超越体なのである。「対象」から成り立つ主体、といういわば矛盾なものが彼の主体的出来事、つまり「現実的存在」なのである。その「現実的存在」に内在している「対象」のコントラストの度合いが内包 (強度) であり、そのさまざまに「永遠的对象」が「現実的存在」をさまざまに彩ると言えるかもしれない。そし

てこうした「対象」と存在、あるいは潜在と現実が共にホワイトヘッドの考える世界である。その出発点が主体である自己超越体であり、そしてそれを基盤にしている彼の哲学が、有機体の哲学である。こうした考えを出発点にして、彼は『過程と実在』の副題でもあるコスモロジーの試論、つまり形而上学的な宇宙論を展開している。このことについては、これからさまざまに論じなければならぬだろう。

#### (4) まとめ

ホワイトヘッドの哲学の主題は一貫して生成であることを確認してきた。(1)では『自然認識の諸原理』において、自然における「出来事」の生成は彼が考える自然の本質的側面の一つであるということを確認した。そして覚知するものの絶対的な固定や延長的抽象化について論じられていることをみた。そして(2)では「対象」から「出来事」へのラインとしてこの書物で「進入」という概念が導入されていることをみてきた。そしてそのことが生成であるのではないかということを確認した。さらに、「出来事」であれ「対象」であれ、認識を可能する「感覚・覚知」についても論じた。そこでは「感覚・覚知」も身体的「出来事」にもなっているのだから、それ自身生成するのではないか、ということを指摘した。(3)では後期の『過程と実在』をみることで、中期での生成の問題をより明瞭にするために主体そのものについて検討した。後期になると、主体が「出来事」に織り込まれた「現実的存在」という生成しつつあることそのものを原理やカテゴリーのなかに描かれて

いることをみてきた。ここでは主体が生成しつつあるものであり、その主体においても「永遠的」対象が「進入」することを確認してきた。「現実的存在」を「永遠的对象」が「進入」しつつあること、そのことがまさに生成であり現実化であることをみてきた。

まとめよう。中期哲学では、「感覚・覚知」を認めながらも、それ自身は生成するというよりもむしろ絶対的なものであり、それゆえ、ある種の主体である「感覚・覚知」やそれによつて生成を捉えることが曖昧な仕方ではか語ることができなかった。つまり、彼の哲学にとつて生成は本質的な自然の側面であるにもかかわらず、その生成を語ることを可能にするものが棚上げされているのである。それに対して、後期哲学では、「現実的存在」という主体的出来事を採用することで、生成そのものを丸ごと語ることが可能になった。本稿では、このようにして、こうしたホワイトヘッドの生成の哲学は後期においてより明瞭に語ることができるようになったという帰結が得られた。そして、彼の後期哲学のさらなるさまざまな射程はこれから論じていかなければならぬだろう。

#### 注

(1) ホワイトヘッドの哲学はしばしば三つの時期に分類される。初期が応用数学や記号論理学について研究していた時期。代表的なものに『普遍代数学』やラッセルとの共著である『プリンキピア・マテマティカ』がある。中期が物理学や後述するような自然哲学について研究していた時期。『自然認識の諸原理』(AN)、『自然の概念』(CN)、『相対性原理』が挙げられる。後期が形而上学を研究していた時期。『科学と近代世界』や『過程と実在』(PR)。

『觀念の冒険』が挙げられる。ここで扱うのは、中期と後期の生成に関する箇所である。

- (2) 例えば、Palter, 1960 や Lewis, 1951 などを参照。延長的抽象化は「出来事」から時間や空間、点や線といった諸々の「対象」を導出する方法である。まずは「出来事」の時空的な延長関係から始まり、それによって抽象的集合、持続などを導出していく。さらにそこから時間面 (level) や時間軸 (zeit)、時間点 (punct) をそれぞれ導出し、それらをすべて合わせた抽象的なミンコフスキー的な時空図をも考察している。

- (3) 『自然認識の諸原理』においては、「感覚・覚知」という語は導入されていない。後述するように、その語は『自然という概念』において初出する。『自然認識の諸原理』では、「出来事」を捉えるある種の主体についての言明は統一されていない。

- (4) PNK, p.97 以下参照。また、註の(2)を参照。

- (5) ただし、Palter, 1960 や Ford, 1984、田中, 1998 や中村, 2007、を述べたように、「出来事」と「現実的存在(生起)」はほぼ同義であるものの、いくつかの点で異なる。「出来事」は延長関係によって分割可能であるが、「現実的存在(生起)」はそれ以上分割不可能な原子的 (atomic) なものである。

- (6) もさろん、ここで論じる限りでは必要がないだけであって、より個別に見ていけば諸々異なる。例えば、中期では論じられていなかった「神」については、とりわけ『過程と実在』第五部第二章で、そして「実在」については、とりわけ『過程と実在』第二部第二章で、それぞれ永遠の対象に付与されて論じられている。

- (7) ここでは、カントについては主観・客観、ホワイトヘッドについては主体・

対象と訳し分けしている。また、もちろんカント哲学にもアプリアリなものが主観に含まれているといった意味ではホワイトヘッドと類似している議論があり(例えば「知覚の先取」(Antizipationen der Wahrnehmung) など)、とりわけカントの哲学体系とホワイトヘッドの哲学体系とを比較したものと) Ford, 1998 がある。

#### 参考文献

- Ford, L. S. [1984] *The Emergence of Whitehead's Metaphysics*, SUNY Press.  
[1998] "Structural Affinities Between Kant and Whitehead," *International Philosophical Quarterly* 38, no. 3.  
Lewis, C. I. [1951] "Categories of Natural Knowledge" in *The Philosophy of A. N. Whitehead*, ed. P. A. Shilpp, Tudor publishing inc.  
Palter, R. M. [1960] *Whitehead's Philosophy of Science*, The Chicago University Press.  
Wallack, F. B. [1980] *The Epical Nature of Process in Whitehead's Metaphysics*, State University of New York Press.  
Whitehead, A. N. [1919/1982] *An Enquiry Concerning The Principles of Natural Knowledge*, Dover Publication inc. (略記 PNK)  
[1920/2004] *The Concept of Nature*, Prometheus Books. (略記 CN)  
[1929/1978] *Process and Reality*, The Free Press. (略記 PR)  
田中裕 [1998] 『ホワイトヘッド』 講談社。  
中村昇 [2007] 『ホワイトヘッドの哲学』 講談社。

# **The Becoming and Subject in Whitehead's Philosophy**

MORI Motonao

This paper treats Becoming and Subject in Whitehead's philosophy. Becoming for his philosophy is the consistent subject from his middle period to the latter period. In the middle, it is the event where he starts his argument when he talks about becoming. Then, it is by our sense-awareness as kind of subject that we grasp event primarily. However when it comes to thinking about sense-awareness including event and object which determines it, these becoming becomes vague. In the middle, whether the concept of ingression that objects determine event concerns with becoming or not also becomes vague. On the contrary, by considering concept of becoming in the latter period correlatively with subject, the becoming becomes not so vague as in the middle period, and it becomes possible to talk about becoming clearly. Subject in the latter period is qualified in becoming event differently from the middle period. In the latter period ingression that object determines event is very becoming itself. Thus we can talk about becoming clearly and systematically. This paper comes problems in the middle to light and show that, by the latter period solves these problems. Whitehead's philosophy of becoming comes out to be clear.